「誰かのために…」と思う気持ちがつくる
優しさの力タチ

学校に花を贈る――
運転ボランティアをする――
地域をきれいにする――
自分がしていることが、
誰かを幸せにしている。
そんな優しい心の人たちが、
この街にいます。
自分のためだけでなく、
誰かのために何かを――
優しさのカタチは人それぞれ。
そんな皆さんを取材しました。

1 生け花に込めた思い

畠中ヒロさん（上区・60歳）

「花を見て、子どもたちの心が和んでくれたら…」。そんな思いで普代中と普代小に生け花を贈り続ける畠中ヒロさん。

自宅で生け花を創作する畠中ヒロさん。「少しでも子どもたちの心が和んでくれたら…」と話します

内面の優しさ養って

2週間に1回のペースで普代中と普代小に生け花を贈っている畠中ヒロさん（60＝上区）。きっかけは、めいの古川美加子さん(43＝上区)の娘さんが普代中に通っていたことから、古川さんに頼まれて2年前の同中の文化祭に生けたのがはじまりと話します。

今は2週間に1回のペースでも、夏場は水が乾きやすいので1週間に1回のペースになるとか。でも畠中さんは「わたしも楽しませてもらっているから」と笑顔で話します。

畠中さんは美容院を営む傍ら、お茶や生け花を習い、今では「草月流」の師範の免許もあるといいます。

畠中さんが生けるのは美容院が休みの日かその前日の夜。季節のものを使い、花の組み合わせ、高さのバランスなど一本一本を慎重に生けていました。そんな畠中さんは子どもたちに「花を見て、内面の優しさを養ってほしいですね」と優しい口調で話してくれました。

配送はめいの古川さん

学校への配送はめいの古川さんが引き受けています。「学校までの間けっこう坂道があるんですよね」と古川さん。あえて交通量の多い国道は避け、時速40㌔で静かに車を走らせます。大事に生けた花だから、崩さないようにと運転には結構気を遣っているようでした。

学校に届いた生け花は、正面玄関に飾られ、子どもたちや先生方、学校を訪れる皆さんを和ませてくれます。

普代中の木村利光校長は、「学校は無機質なものなので、その中に花などを飾り環境を整えることは、生徒の成長過程で重要なことです。その環境を畠中さんには作ってもらっていて、感謝しています」と話します。

生け花を配送するのは古川美加子さんの役目。形を崩さないように慎重に運びます

1通の手紙に励まされ

うれしかったことはと尋ねると畠中さんは「小学生がこういうものをくれたんですよ」と1通の手紙を見せてくれました。手紙にはこう書いてありました。

畠中ヒロさんへ

私は先生方の玄関を通る時、かざられている花を1度見ると、立ち止まりたくなります。それは心がやすらぐというか、気持ちが優しくなるような気がするからです。私はクリスマスの時の花がとても好きでした。花を見ていると心が明るくなります。それは学校全体が明るくなるようでうれしくなります。だから学校を光らせてくれます。いつも花をかざっていただき、ありがとうございます。2月の花も楽しみにしています。

児童代表　深渡　美穂

子どもたちからの手紙は、畠中さんの宝物。「体が動くまで続けたいですねー」と笑顔で話します。畠中さんの優しい心は、「生け花」というカタチになって、今日も子どもたちの心に潤いを与えています。

普代中(左)と普代小(右)のそれぞれの正面玄関に飾られた生け花